長崎灯台足元灯（長崎県の建築史）

長崎の唐寺にみられる中国古建築《黄檗様式》

長崎支部　河﨑晶子

長崎の中国風建築である唐寺は黄檗宗寺院です。黄檗様といわれる建築様式とはどのようなものでしょうか。唐寺の成立と黄檗宗の係わりを紐解き、黄檗様式に着目した唐寺の特徴を紹介しようと思います。

長崎唐寺の創建

長崎の唐三ケ寺というのは**興福寺**、**福済寺**、**崇福寺**である。三ケ寺より半世紀あとに建立された**聖福寺**と合わせて四福寺と呼ばれる。もと唐寺が創建された背景には、長崎貿易で来航し居住するようになった唐人たちが航海の安全を司る媽祖を祀るためのお堂を必要とした、さらに江戸幕府の寺請制度により菩提を必要としキリスト教信者でないことの証明のため、などの事情があった。興福寺、福済寺は黄檗派寺院創建より以前に、同郷の中国人で媽祖を祀ることがおこなわれ、以降に仏教寺院として整備された。中国人のための唐寺は長崎だけにあり、このように媽祖堂をもつ黄檗派寺院建築は長崎の三ケ寺のみである。

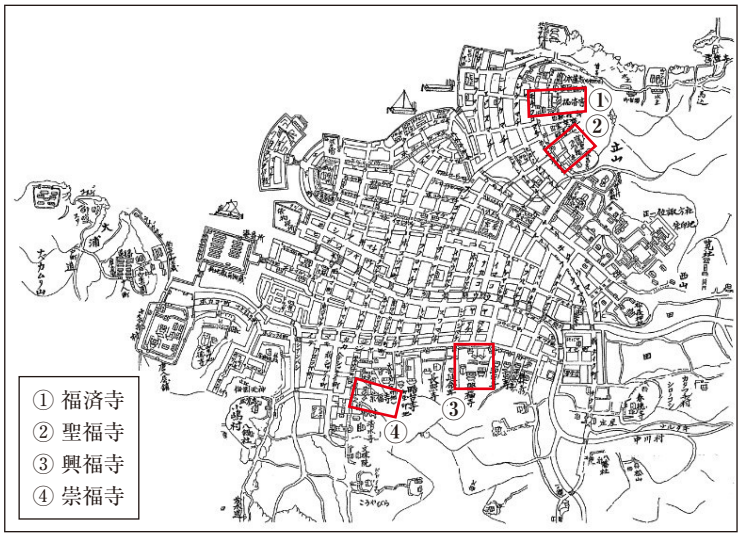

図-1　唐寺の位置（地図：長崎文献社「長崎町盡し 総町編」より）

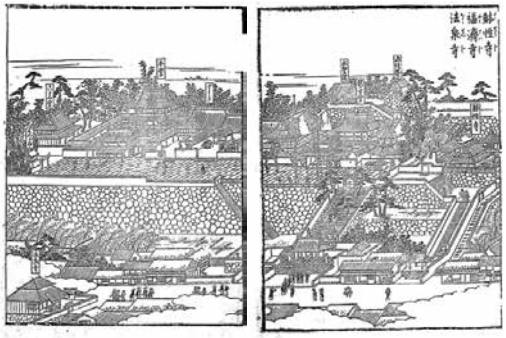

図-2　福済寺（「長崎名勝図絵」より）

福済寺：寛永５年（1628）覚悔により開基（別名：漳州寺・泉州寺）　かつては黄檗寺院建築だったが原爆により焼失してしまい、現在は戦後に再建された近代的な寺院である。本稿では取り上げない。

○黄檗宗萬福寺と隠元　　文献１）

日本に黄檗文化が急激にひろまった背景は隠元禅師の来日、宇治の黄檗山万福寺の創建と切り離せない。黄檗文化は宗教界、人々の生活文化に多大な影響をもたらした。第四代将軍家綱が寺地、資金、材木を与え、大檀越となり万福寺が創建された。寛文元年（1661）建造が開始され寛文８年（1668）大雄宝殿が上棟し、寛文13年頃には主要伽藍はほぼ完成した。明末の中国禅院伽藍を忠実に反映した伽藍構成であった。

寛文３年（1663）、新建の法堂で隠元により開堂がおこなわれた。翌年、隠元は法嗣の中国僧木庵に二代目住持を任せて退隠した。木庵は万福寺の造営の第一線に立った。隠元は寛文13年（1673）示寂、83歳であった。

＝黄檗派の成立＝

「日本における黄檗派は中国から隠元禅師が来日したことによって成立した宗派である。
当時、長崎に居留していた中国人たちによって、興福寺、福済寺、崇福寺の三つの寺が建立されて、中国人のよりどころとなっていた。
隠元禅師は、空席になっていた崇福寺の住職として招かれ、四度にわたる招請の結果、承応三年(1654)に来日し、どういうわけか興福寺に晋住している。
隠元禅師は中国系の寺に、中国人のために来日したつもりであったが、来日前からそれを知っていた日本の僧たちが多数集まり、…（略）…寛文元年京都の宇治に、中国と同じ名前の黄檗山万福寺を創建し、ここに黄檗派が成立することとなった。
黄檗派はもともと臨済宗であったが、日本に来てから、日本の臨済宗とは違う宗団を形成していったので、臨済宗黄檗派とよばれるようになり、明治時代になって黄檗宗という名称になっている。」

木村得玄「隠元禅師と黄檗文化」より引用

東明山 興福寺　（南京寺）創立：元和９年（1623）　開基：真円

［**沿革・現存建物の建設年**※1］寛永９年（1632）黙子如定により伽藍整備、寺院の創建。寛文大火（寛文３年、1663）のあと現在の伽藍配置になる。**大雄宝殿**：明治 16 年（1883）、**媽祖堂**：宝永３年（1706）、**鐘鼓楼**：19C 前期大規模改修、**山門**：元禄４年（1691）（数次の修理）、**三江会所門**：明治 16 年（1883）（原爆の爆風により壊滅し門だけ遺る。）

［**特徴**］大雄宝殿は中国で切り組みされた木材を運び、中国人の工匠の手になる純中国建築様式。媽祖堂の細部は和風で日本人大工の手になる。最古の黄檗派寺院建築である。

図-3　興福寺伽藍構成　　文献２）

大雄宝殿

・甎箪型の棟飾り
・再建前は一重入母屋であったが、重層屋根になる

・正面一間吹き放し（上）
・半円状の黄檗天井（下）

媽祖堂

・細部に彫刻や彩色
・扉前の建具：上方は格子の嵌め殺し、下方は開花文様の半扉

三門

・二重虹梁の上部に海老虹梁
・蟇股を多く使用する

鐘鼓楼

・２階長押上に成の高い板材を四周に回す意匠が独特

三江会所門

・純中国風、長屋門形式
・半円状の黄檗天井
・壁に大きな自然石が嵌め込まれている。
・挿肘木、木鼻、持ち送り：彫刻・文様・透かし彫りなど独特

○禅宗様の特徴　　文献３）

①堂内に床を張らず土間とする。石の礎盤を置いてその上に柱を立てる。

②柱梁が角断面で部材が細く、朱色などの彩色が施される。

③梁の上に「詰組」とよばれる柱や肘木をともなわない組物を置く。（通常組物は柱か肘木の上に置く）

○黄檗山萬福寺の特徴（黄檗様）　　文献３），５）

・伽藍は三門、天王殿、大雄宝殿、法堂が一直線に並ぶ。
・屋根は強い反りをもつ上、中央に宝珠をのせる。
・棟の両側には魔伽羅（まから）と呼ばれる鯱（しゃちほこ）を置く。
・花頭窓の変わりに円窓を用いる。
・大雄宝殿の正面一間吹き放しは半円状の黄檗天井。

※黄檗宗では本堂（仏殿）を大雄宝殿（だいおうほうでん・だいゆうほうでん）と呼ぶ

黄檗山萬福寺 大雄宝殿 宝殿

写真：淡交社「古寺巡礼 京都19　萬福寺」より

聖寿山 崇福寺（福州寺）　創建：寛永年（1635）　開基：超然

［**沿革・現存建物の建設年**※1］**大雄宝殿**：正保３年（1646）元来単層流造りであったが、元禄 14 年（1701）重層に改築。その際、上部柱は根継ぎされた。**護法堂**：享保 16 年（1731）、**媽祖堂**：寛政７年（1795）、**媽祖門**：文政 10 年（1827）再建、**鐘鼓楼**：正保５年（1648）創建、享保 13 年（1728）改築、**第一峰門**：寛永 21 年（1644）、**三門（楼門）**：嘉永２年（1850）（古くは 1673 年完工、1766 年大火で類焼、文化 11 年（1814）建立、文政 11 年（1828）大風のため崩壊、かつては単層三間の八脚門であった）

［**特徴**］江戸時代の伽藍構成をとどめている。媽祖堂を通る軸、大雄宝殿を通る軸の２軸がある。隣り合う建物は軒を接している。石敷き中庭をもつ。

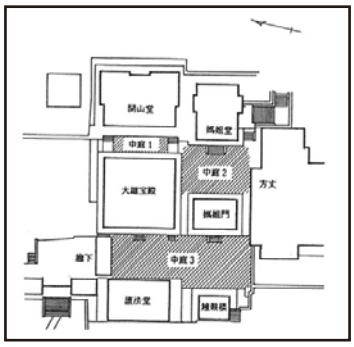

図- 5　崇福寺伽藍構成　文献５）

大雄宝殿

・垂花、釣束は独特。扁平垂木、繁垂木

媽祖門

・前面は黄檗天井、背面は山型

媽祖堂

・卍崩しの木製勾欄

三門（楼門）

・下層は色漆喰
・棟中央に宝瓶型飾り
・文様、彩色など豊か

第一峰門

・中国の工匠による明末の様式
・構造手法は日本で類例なく、細部の文様・彩色・装飾も中国のもの

護法堂

・木材はコウヨウザン（福州杉）
・柱頭部に藤巻きがある
・組物は大仏様四段挿肘木

鐘鼓楼

・横架材を柱に指し通す特異な構造手法

万寿山 聖福寺（広東寺）　創建：延宝５年（1677）　開基：鉄心道胖

［**沿革・現存建物の建設年**※1］木庵に師事した鉄心道胖が智覚院を譲り受け開基。**大雄宝殿**：元禄 10 年（1697）再建・正徳５年（1715）改修、**山門**：元禄 16 年（1703）、**天王殿**：宝永２年（1705）、**鐘楼**：創立期頃。禅堂は原爆で崩壊。他の建物もことごとく消滅。堺の大工による建造。

（※ 2021 年７月現在 大雄宝殿と山門は保存修理工事中である）

［**特徴**］本山萬福寺創建以後に開設され、本山の伽藍を手本とされた。大雄宝殿を中心とする軸をもつ。大雄宝殿の屋根も本山と同じ二重、上層入母屋である。三ケ寺と異なり媽祖堂をもたない。

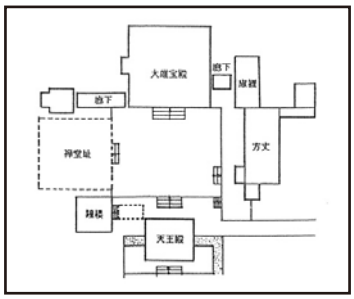

図- 6　聖福寺伽藍構成　文献５）

大雄宝殿

正面一間吹き放し黄檗天井

桃の彫り込みの半扉

・宝珠形の棟飾り、鯱、鬼瓦鳥衾瓦付。釉のかかった赤瓦。
・角柱几帳面取り・怪魚の持ち送り

天王殿

・黄檗天井
・反曲する輪垂木

鐘楼

扉には桃形の彫り込み

まとめ　～長崎の唐寺にみられる黄檗様式～

●伽藍配置

興福寺は伽藍構成は不明確で、崇福寺は２列の中軸線をもち、石敷き中庭に向かって各堂宇を配置する。聖福寺は本山を手本とした伽藍構成がみられる。

●柱脚部と床面

礎盤を据えその上に柱を立てる。礎盤に木瓜型の掘り込みを入れる。建物内部は土間で床は四半瓦敷、前面一間通りは四半石敷である。

崇福寺護法堂 礎盤･四半石敷

●正面一間吹き放しと黄檗天井

建物の正面一間を吹き放しとし、この部分を「黄檗天井」とする。黄檗天井には、イ）半円型、ロ）中央のみ円弧形、左右は直線、ハ）茨をもつ唐破風形状、ニ）反曲する形状　がある。黄檗天井は黄檗寺院の中で九州では長崎のみにみられる。

崇福寺媽祖堂 黄檗天井 ハ）

●屋根

大雄宝殿の屋根は重層とする。（後に改築で重層となる）棟中央にひょうたん型や宝珠型の飾りを置く。

●細部

・柱は角柱面取りとする・垂木は扁平（ゴヒラ形）、繁垂木・正面中央の桟唐戸の前に半扉を設ける。
・虹梁、挿肘木、木鼻、持ち送りなどに掘り込み彩色など装飾性。卍崩し、丸窓、透かし彫りの意匠など。

◆ ◆ ◆ 長崎唐寺の特異性 ◆ ◆ ◆

◎媽祖堂をもつ。寺院の創立よりずっと早くから媽祖を祀る必要があった。媽祖堂が伽藍の中で大きな位置を占める。
◎中国より舶載の材を用い、中国工匠の手になる。（日本人大工も参加する）
◎明末の中国の建築様式を伝える。（細部には和様もみられる）

興福寺大雄宝殿　正面の扁額

むすび

以上、黄檗様式の特徴から長崎唐寺を見てきましたが、長崎の唐寺は歴史的に特異な成立過程を経て、大変貴重なものと分かりました。実際にみると、時を超えた中国古建築の佇まいと珍しい様式に目をみはります。皆様も今一度、訪ねてみられてはいかがでしょうか。なお、本稿は山本輝雄氏の研究著書 5）を参考としてまとめ、様式の解説は長崎県教育委員会の報告書 4）より引用しました。ただし、ごく一部の紹介にとどまります。より深くご興味のある方はこれらの文献をご参照ください。拙稿に助言いただいた長崎総合科学大学の李桓教授に謝意を表します。

参考・引用文献（本文中記載以外）

1）竹貫元勝「黄檗宗教団の形成と展開」;『叢書 禅と日本文化 10　禅とその歴史』編集 石川力山より
2）長崎文献社　旅する長崎学 16　海の道　Ⅳ中国交流編「長崎で体感する中国ワールド 唐人さんからのおくりもの」
3）宮元健次「日本建築のみかた」
4）長崎県教育委員会「長崎県建造物復元記録図報告書（黄檗）昭和 63 年３月」
5）山本輝雄「九州の黄檗派寺院に関する建築史的研究　平成３年４月」

※１　沿革・建設年は文献４），５）による　　※長崎唐寺の写真はすべて筆者撮影

『長崎の唐寺にみられる中国古建築』コメント

長崎総合科学大学 建築学科 教授　**山田 由香里**

九州には６件の国宝の指定を受けた文化財建造物がある。このうち半分が長崎にあって、大浦天主堂、崇福寺第一峰門、同大雄宝殿の３件である。国宝は重要文化財の中で世界文化の見地から価値が高く、たぐいない国民の宝たるものだから、長崎の唐寺の重要性と稀少性を示せよう。

崇福寺大雄宝殿を現地で説明するときの常套解説がある。この建物は最初、一重屋根の建物として中国人工匠が造った（1646）。福済寺大雄宝殿（1649）の二重屋根に負けまいと、崇福寺も二重屋根を増築した（1681）。増築を日本人工匠が担った結果、ひとつの建物に中国と日本が混在することになった。下層は、木材に中国のコウヨウザン（広葉杉）を使い、逆擬宝珠の持ち送りを軒廻りに使い、黄檗天井と呼ばれるアーチ型天井が独特。対して、上層はケヤキ材を使い和様でまとめる。違いは軒先の垂木で見るのがわかりやすい。下層は垂木を平使い（横長の断面）し、上層は正方形断面である。

この説明に興味を持った私のゼミ生が、卒業研究に「長崎唐寺における垂木の平使いに関する研究」をテーマにし、長崎市内の唐寺など34棟の垂木を見上げたところ、21棟に平使いが見られた。その理由は、長崎唐人出身地の福建省や浙江省で見られる技法で、中国の建築は野地板を使わず垂木に直接瓦を載せるため平使いは安定よく、板状面に装飾が施せるからではないかと結論づけた。彼女がゼミに在籍した一年は長崎を新たな目で見られた。以来、唐寺では垂木を見上げるのである。

支部だより～長崎支部～

2021年４月～2021年７月

令和３年度・長崎支部総会開催！

４月23日（金）16時30分より、ホテルセントヒル長崎において、長崎支部総会が開催されました。新型コロナウイルス感染予防を実施したうえで長崎支部定時総会を開催しました。参加者29名、委任状148通で総会は成立致しました。懇親会は自粛して、中止としました。

中野支部長挨拶

上山副支部長　有馬副支部長

議長は松寺会員

司会は川瀬理事

諸岡常務理事より報告

御所監事より報告

会場のようす